

氏名	ヒダカミドリ 日高翠		
学位の種類	博士（文化財）		
学位記番号	博美第392号		
学位授与年月日	平成25年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉中部ルーマニアにおける正教会修道院附属病院教会堂の 壁画に関する研究		
(主査)	東京芸術大学	教授（美術学部）	木島隆康
(副査)	〃	〃（〃）	佐藤一郎
(〃)	〃	〃（〃）	桐野文良
(〃)	〃	名誉教授	歌田真介

(論文内容の要旨)

(1) 研究目的、研究の意義と方法論

ルーマニアを含むバルカン地域は、古くから多民族による群雄割拠が続いたために、民族意識や社会体制の確立において後進地域とされてきた。しかしながら文化的には、西洋とイスラム世界の狭間にありながら、固有の精神文化を長期にわたって保持した地域であると考えられる。その最たる様相が、ルーマニア中部に現存する一連の病院教会堂にみられる。本論は、この病院教会堂の壁画装飾に関し、その特徴を多面的に捉え、科学的論拠に基づいた考察を加えることで新しい情報として提供するものである。

病院教会堂とは、ルーマニア正教会の修道院に附属する教会堂の一種で、修道院施設内に建てられた療養所に併設されたものをいう。中世以前の修道院にはしばしば、病気や老年の修道士を対象とした療養所が附属しており、初期の所内に設けられた礼拝所は、後に独立した教会堂＝病院教会堂へと発展した。現代の病院施設が確立されていくなかで療養所がその役割を終えたのに対し、病院教会堂はギリシアの一部地域やセルビア、ルーマニアにおいて固有の宗教施設として残されたと考えられる。

ルーマニアに現存する病院教会堂の大半はオルテニア地方に集中しており、またその多くが16～17世紀に建造されている。これは、当時この地を統治したワラキア公国の最盛期にあたる。ワラキア公国は、国内を東部ムンテニアと西部オルテニアに分け、平野部のムンテニアに政治経済の要所を置き、丘陵地帯のオルテニアにおいて修道生活を保障することで、修道規定の整備と宗教美術の成熟を可能とした。

本論では、コジヤ修道院附属病院教会堂およびホレズ修道院附属病院教会堂をとりあげ、2008年から計8回の現地訪問を通して、①現地調査、②材料分析を実施した。①現地調査では、二次元および三次元の光学的調査、壁画の熟覧観察を実施することで堂内壁画の図像を同定、記録し、美術様式の特徴を明示する。また、②材料分析では、壁面試料を採取のうえ、分析によりその組成を特定し、壁画の立体構造を明らかにすることを試みた。文献調査および専門家や関係者へのインタビューを通して、病院教会堂の歴史的、社会的位置づけを探り、上記の考察に加えるとともに、筆者が現地訪問したオルテニア地方の13の実例および、すでに文献で報告されているものを比較対象として設定することで研究成果の信頼性を高める。本論は、これまであまり論究されてこなかった病院教会堂における壁画の歴史上の意味、図像や技法の特徴を具体的に明示することを目的としており、これにより得られた成果は、将来的な保存修復作業の指針を決定するにあたり有用であるのに加え、正教会教会堂の壁画に対する科学的調査が欠如しているバルカン地域全体において基盤となる情報を提供できるものである。

## (2) 調査結果および結論

病院教会堂の壁画の図像は、ビザンツ様式の教会堂における図像を基本としている。4世紀の殉教者が優先して描かれており、奉献対象や地元の聖人の描写は比較的少ない。4世紀を含む初期のキリスト教はそもそも、貧困層を中心に広まった信仰であり、病気の者や貧しい者のために神が存在するという思想が深く信じられた。ルーマニア正教会はこの初期キリスト教の思想を今日まで変わらず受け継いでいるもので、その理念が顕著に体现されたものが病院教会堂の創建であったと考えられる。

4世紀の殉教者は、もっとも神聖な空間とされる教会堂東端の至聖所に多く描かれており、ギリシアなどで見られる様相に類似している。病院教会堂は建築構造においても、旧約聖書のソロモン神殿に由来する三室構造を採用しており、総じて古典的様相を模していると言える。

ところが至聖所から離れるにしたがって、独自の視点から構成された図像が観察される。もっとも特徴的であるのが、「治癒の奇蹟」が多く採用され、「前駆授洗イオアン(正教会における洗礼者ヨハネの呼称)の生涯」のエピソードがまとまって描かれていることである。「治癒の奇蹟」は、病人を癒したキリストの奇蹟の行ないを指し、前駆授洗イオアンは、洗礼を「再び生まれ変わる行為」と捉える正教会において「新しい命を与える者」を意味する。殉教図もまた、病院教会堂の趣旨に合致する点で特に好まれたと考えられ、なかには一見珍しい図像もあるが、いずれも史料に記述をみることができ、すなわち、専門家による聖書の十分な研究、熟考によって図像が決定されたと推測される。病院教会堂の図像における特徴は、伝統的な様相を優先しながらも、独自の視点から図像を構成することで、教会堂の特殊性を主張した点にある。

②材料分析ではまず、壁画の技法を科学的視点から分類した。本論における壁画は、煉瓦壁に2層の異なる漆喰層が塗布され、その上に絵具層が施されたものをいうが、この絵具の塗布方法について：A. 漆喰の固化前に顔料を水で溶いて描く「ブオンフレスコ技法」、B. 消石灰を固着材とする「メツゾフレスコ技法」、C. 漆喰の固化後に接着剤を用いて描く「セッコ技法」の三つに分類した。本研究における試料作製および材料分析の結果、ブオンフレスコ技法は素描の要領で壁面全面の最下層に塗布されており、本格的な装飾はまずメツゾフレスコ技法、次にセッコ技法に依って施されていることが科学的に認められた。この描画順序は徹底されており、図像によって意識的に彩色材料を区別している様子も明らかとなった。加えて材料分析の結果、各層はあまり混色されず、重層構造により色彩を表現していたことが確認された。材料分析ではこのほか、壁画に使用された無機顔料を特定したが、なかでも、銀箔、鉛錫黄の使用、スマルトの多用が確認できたことは特筆に値する成果であった。また、有機分析の結果として、油を有機接着剤として使用した可能性を指摘したが、これは壁画への有機物質の使用に関する研究報告が欠如する当該地域において、将来的な技法解明にあたる一つの指針となる情報を提供したものである。

本論において、病院教会堂は初期キリスト教の思想が深く信じられたことにより生まれた施設であり、その壁画の様相に関して、極めて合理的な描画技法が確立されていたと結論づけられる。礼拝者が限定されていたために、大きな変更を加えられることなく今日まで残されてきた病院教会堂は、ルーマニア、あるいはバルカン地域全体における壁画装飾を考えるうえで大変貴重な情報を有している。

### (博士論文審査結果の要旨)

本論文は、中部ルーマニアに位置するオルテニア地方に集まる正教会修道院附属病院教会堂内に描かれた壁画に関する研究である。この病院教会堂の壁画装飾に関して、その特徴を歴史的視点、図像学的視点から美術的な特徴を示し、加えて壁画の絵画技法材料の分析によって科学的にその作られた堂内壁画構造を明らかにしようとする総合的な研究である。本論文は3章からなる。

第1章では、壁画研究の意義と方法論を述べるとともに、史料、文献、現地の専門家等へのインタビ

ューを通して、教会堂の歴史的な位置づけが行われている。病院教会堂は主にオルテニアに集中しており、ワラキア公国によって丘陵地帯におかれ修道生活が保障されて独自の修道規定とともに独自の宗教美術が可能となったとしている。

第2章では、主な調査対象であるコジヤ修道院附属教会堂、ホレズ修道院附属教会堂について歴史的視点から概要が述べられ、現地にて壁画を直接熟覧し、図像研究を加味して美術的特徴を示している。

第3章では、壁画の構造と絵画技法材料の解明を目的に、光学的調査を実施し、携帯型マイクロメータースコープによるデジタル撮影によって絵画層の表面観察も行ってその構成を観察している。また、教会堂の構造を立体的に把握する目的で三次元(3D)レーザー測定も行い実測結果をパソコン上で展開できるように将来の変化を見すえた状態記録として残している。さらに壁画微小試料片を採取して実体顕微鏡による積層構造観察によって制作手順を明確にしている。この微小試料片の成分分析では、壁画制作技法の特徴と使用材料が明らかにされたことは大きな成果といえる。たとえば彩色手順では、漆喰の固化前に水溶きした顔料で描く「ブオンフレスコ技法」、顔料に消石灰を固着剤として混ぜ合わせて描く「メZZフレスコ技法」、漆喰の固化後に描く「セッコ技法」に分類されている。それらが確固としてシステムティックに壁画制作が行われていたことを成分分析の科学的論拠にもとづいて明らかにしたことは本研究の大きな成果であろう。無機顔料の特定では、特に、銀箔、鉛錫黄(レドチンイエロー)の使用、スマルトの多用を確認した点が評価できる。

対象としたふたつの修道院附属教会堂は、創建当初の様相を知る上で後年あまり手を加えられずに奇跡的に保存されてきたことが選択の大きな理由であったと考える。日高翠はこの貴重な史跡調査のために、海外でありながら2006年からルーマニアの教会堂壁画に興味を抱き現在まで計11回の現地調査が行われて長期にわたる壁画への強いこだわりをもって本論文の結論としている。また、本論文は日高の粘り強く真摯で熱意ある研究姿勢によって生まれたものであり、美術史的視点に偏っていた先行研究の限界を超えた野心的な研究とも言える。つまり、調査対象の壁画の特徴を単に歴史的あるいは図像学的観点からだけでなく、それに科学的論拠を加えて総合している点である。この研究成果は、今後、ルーマニアに散在する多くの教会堂壁画修復に有用な情報として活用されるに違いない。

以上述べた内容は、審査員者全員の評価であり、本論文は学位論文に相応しい研究内容であると判断した。